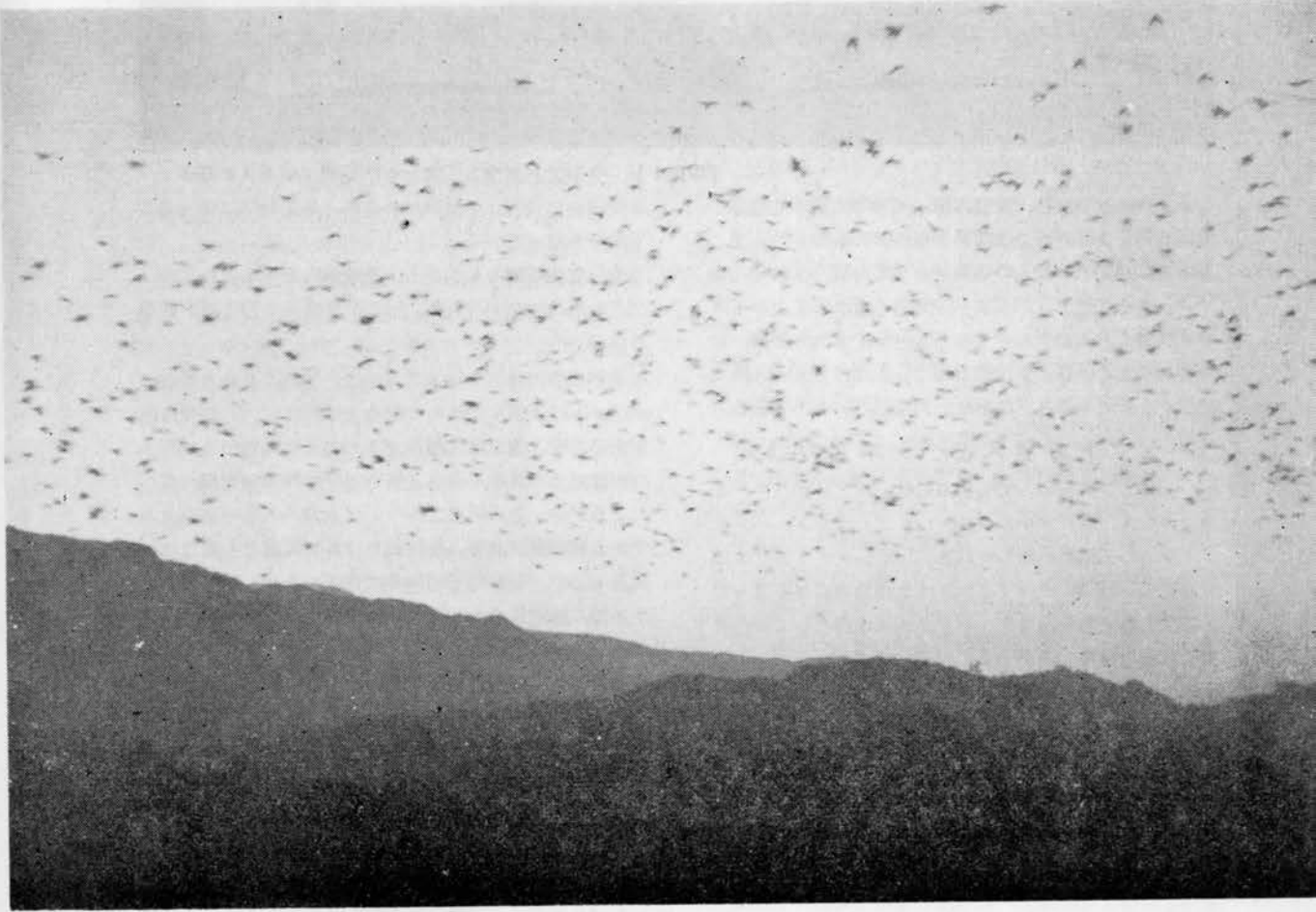


山と博物館

第 7 卷 第 9 号

1962年9月25日



伊那谷のカラスが集結したところ

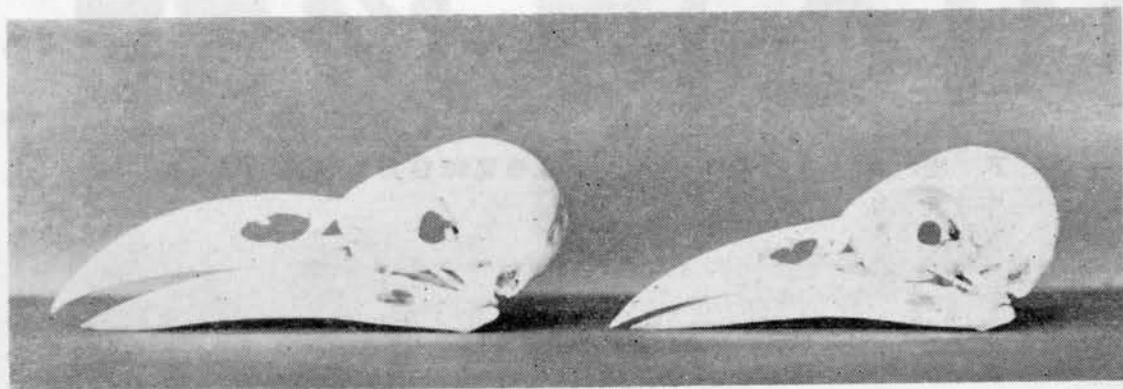
上伊那郡葛島にて

撮影 山 岸 哲

大町山岳博物館

カラス談義

山 岸 哲



【写真1】 ハシブトガラス(左)とハシボソガラスの頭骨

カラスほど昔から、童話、諺、文学等に数多く登場している鳥も少ないのではなからうか。にもかゝらず、カラスに対する一般人の知識というものは、「あゝ、カラス。黒くてカアア、カアアって鳴く鳥だな」とか「カラスが鳴くと人が死ぬってねえ」とか「カラスかい、お寺の森によくいるよ」位のものでしかない。カラスの生活をさぐってみると、なかなかおもしろいものである。

ハシブトガラスとハシボソガラス

一口にカラスといっても日本には、ワタリガラス、ミヤマガラス、コクマルガラス、ハシブトガラス、ハシボソガラスの五種類が棲んでいる。しかしワタリガラスは北海道の一部に、ミヤマガラスは九州地方に冬期渡ってくる渡り鳥であり、コクマルガラスは迷鳥として現在までに数羽の捕獲記録があるに過ぎない。

従って長野県に普通に観察されるカラスはハシブトガラスとハシボソガラスの二種だけである。その判別点は体が前者の方が少し大きいこと。そのクチバシが名の如く前者が太くて、後者が細いことにある。(写真1)

鳴き声が「アア、アア」と「カアア、カアア」とちがう等と書かれた図鑑にもお目にかゝるが、なかなかどうして、声だけで区別するのはむづかしい。だからやっぱり、はっきり区別するとなると体の大きさか、クチバシの太さにたよるより他はない。

食生活

食性で、雑食性といえ、昆虫などの動物質も食べ、草や木の実などの植物質も食べるといったタイプの両刀使いを普通云うが、カラスに至っては雑食とはまさにその名の如く、何でも食らう。言ってみればカラスは「ゴミ屋」である。胃袋の中はゴミタメと変わりなく、米や麦トウモロコシ、豆類のような穀物から、樹木、野草の実などの植物質、ネズミ、モグラ、魚の骨片、芋虫、毛虫果ては人糞まで食する。私の村には天竜川に面した崩崖

を使用した共同ゴミ捨場があるが、冬と春には終日そこで餌をあざっている。

そして繁殖期ともなると、そこから大きな兔の足や、ブタの耳、ニワトリの翼、足などを運んで行くのが観察される。

私が彼等の食性を知った方法は、観察による方法と、ペリットによるものなので完全とは言えない。鳥の食性調査の大家、池田真次郎博士は、北は北海道から、南は九州までカラスを千羽ほど集めて胃の内容物を調べられたそうだが、その結果は、ハシブトガラスもハシボソガラスも植物質が88%、動物質が12%で両種とも変わりがなかったが、しかしその内容に問題があり、ハシブトガラスでは植物質のうち25%が農作物、45%が樹木の種子3%が野草の種子という割合で。ハシボソガラスでは農作物が77%、樹木の種子が20%、野草の種子が3%であったという。

農作物である米、麦、トウモロコシを食べている量からみると、ハシボソガラスの方が農業には一害を及ぼすとみるべきで、より森林に関係の深いのはハシブトガラスであろう。

次に、動物質については全食物からみるとわずかその12%であるが、ハシブトガラスではその内容は、昆虫が7%、ネズミ、魚類などの骨片が5%であるのに比べてハシボソガラスでは昆虫類が10%で同じくその他のものが2%である。

人間の食生活の変化にともない、ゴミ捨場の内容物も豊富になってきて、池田博士の調査した当時と最近では少しちがうだろうが、ともかく、このような食性のちがいが出て来る以上、かならず、すみわけが行われているのではないかという予想をたてている。

就 時 行 動

「秋は夕ぐれ、夕日のさして山の端いと近くなりたる

に、カラスの寝ぐらへ行くとして、三つ四つ二つなど、飛びゆくさえあわれなり」

枕草子のほう頭にあり、清少納言が四季おのおの特色をよく見ぬいて、春夏秋冬をほめているうちの秋の部分であって、カラスが群れをなして夕方ネグラへ帰って行く様を言っているのだが。このようにカラスが集団で夜間に一ヶ所に就眠するという習性は平安朝時代にもう人によく知られていたものらしい。清少納言の後塵をはいするわけではないが、私が今までカラスをやってきたといっても、実はこの就時行動について主にやってきたのである。清少納言は「三つ四つ二つ」などと、まことに文学的なことを言っているが、4000羽からのカラスが時に集まった様子というものは、とても「あわれなり」などとはいえず、全く「いとそうぞうしい」ものである。(表紙写真)

カラス(ハシブトとハシボソを一緒にして以後カラスとする)たちは昼間は三々五々ちらばって田んぼや、河原やゴミ捨て場などで採食しているが、日没前約二時間前頃になると、採食場附近のお寺の森とか送電線の鉄塔とか、松林などに集まりはじめる。この集結する場所がカラスが夜間眠る時だと早合点されては困る。これは、これからネグラに向けて出発するカラスたちの集合所なのである。このような集合所がネグラに向けて点々と存在し時から遠い所の集合所を出発したカラスの集団は段々時に近い集合所に集合しているカラスの群に合流しながら時に向うのである。

この様は、小学生が学校から遠い者が友達を呼び合ってグループを作り学校に通って来るようなもので、或る四ツ角でそういうグループ同志が待ち合せ、増々大きなグループになって学校の門をくゞに非常によく似

ている。こういう行動を Tumber はホシムドリで観察し flight line assembly と呼んでいる。

時で観察していると、帰ってくるカラスの群れは日没後(日没時の照度は500ルクスから5600ルクス位)に急

激にその数を増すが時に飛来しても直ぐには時の樹林にとびこまないのが普通である。大きな河に面する時では河原の中洲とか、附近に田んぼや畠があればそこに、それから送電線など、まわりの見通しのきく場所に、次から次とまい下りる。こういう行動も Tumber はすでにホシムドリで観察し、pre-roostir'ng assembly (就時直前集合所)と呼んだが、カラスでも全く同じである。

この集合期が何を意味するかは、はっきりまだわからないが、そこで彼等は採食したり、ジツろづくまったり、水浴したりしている。

こうしているうちにどンドン夕闇はたちこめ、500ルクス以下のあかるさになる頃、大群で時の樹林の中にすいこまれるように入時する。入時した直後は、竹林では梢に止っているが序々に下へもぐりこむ。そして入時しても30分位はガアー、ガアーやっていて、眠りに落ちていくのである。しかし、人間がコソソリでも、時に近づくと、すぐに少数の個体が「クー、クー」と小声で鳴きはじめ、時の樹林内へでもふみこもものならずぐさま「ゴーツ」というものすごい音をたて、何千羽というカラスが夜中の空へまい上る。こういうことから考えてもカラスが集団で就眠する意味が薄々ではあるがわかるような気がするのである。

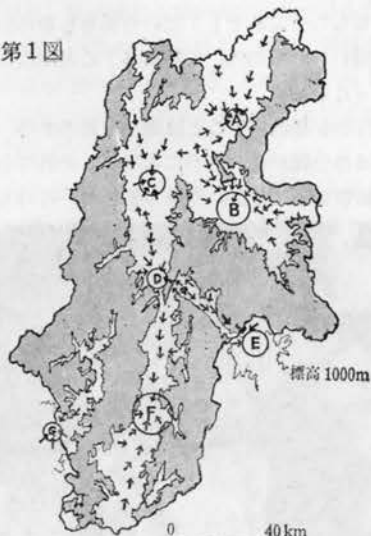
このようなカラスの時は冬季、長野県下に7ヶ所ある(第1図)時の樹相はアカマツと竹林が主であるが、この両種が冬でも落葉しないことに関係がありそうである。春と秋には時の数は増える。これはカラスたちが繁殖のため分散するためであるが、このため、春秋時の規模は冬季時に比して小さい。逆に一地方のカラスが全部一ヶ所に集まるようになる冬の時の場合には伊那谷のように集結範囲が南北約80kmにも及ぶ所では、就時するカラスの数も3000羽をこす。(第1図中のF)

お寺の森に眠るとばかり思われていたカラスが十里も飛んで時へ帰るということは、おどろくに充分だが、彼等の飛行速度を実際に測ってみたら約毎時56kmであったから、そんなに時間はかゝらないだろう。それに「十里もの速くまで」と我々は言うが、それはあくまで我々の概念の上からの距離であって、鳥が空から見る40kmというものはそんなにたいしたものではなく、晴れてさえいれば、300メートル上空では鳥は半径66.6キロメートルの周囲が見渡せるというから、鳥にとっては裏山へ帰るのも40km先の竹林へ帰るのもそんなに変わりがないだろう。視力にたよって時へ帰るといことは、濃霧の時などは、霧の晴れ間に集合所を出発することからもうなづけるのである

カラスは助平か？

猛禽類が小動物を丸呑みにして、不消化物を丸めて吐き出すことはよく知られている。これを吐出球(ペリット)と呼ぶが、カラスの時内でこれを見つけたときには

第1図



長野県下に観察した1月上旬~3月上旬におけるカラスの冬季時の分布図
矢印は薄暮期の就時飛行方向を示す



「カラスがこんなものを」と思ってギクリとしたものだった。それだけに調べてみて1918年にTounsandがマサチューセッツ州でカラスと同属のC・Brachyrhynchosの時から数百個のペリットを採集し、Kalmbachが1920年にこのペリットを分析したことを知ったときには大そうガッカリした。わがハシブトガラスとハシボソガラスがペリットを出すことは北大の芳賀氏なども観察はしておられるらしいが分析は未だのようである。私は県下の畷を歩いて、このペリットをセッセと集めて歩いた。(写真2)

そうするとカラスの食べているものについて分かったが、同時に他のこともわかった。それはカラスが本来食べないものを食べているということである。これについてもシートンがあの有名な「動物記」の銀星鴉の項で、カラスがビールのセンやガラス類を収集すると書いてはいるが、畷に落ちているものときたら、ビールのセンやガラスなんていう代物ではない。輪ゴムを何十個というほどギッチリと5cm位の球にして吐き出したもの、乳児のオシャブリ、オハジキ、フウセン、チューインガム、事務用の指サック、アメの包紙、ソーセージやハムの止金、カタツムリ、ハチの巣、ソーセージの皮、あげくのはてには何と衛生サックまで畷に持ち込む。おそらく畷にまかれた下肥の中に混じていたものであろうが、カラスは助平な鳥である。でも、よくよく考えてみると、カラスの集めたそんなものをよるこんでまた集めて悦に入っている人間こそ、品がないというものだ。

カラスと人間生活

話も大部落ちてきたし、紙面も限りがあるので最後にカラスと人間生活について簡単にふれておく。年配の人なら、カラスはかならず、人間の心のふるさとに生きているものと思う。幼かった日の夕暮れに、あの美しい夕やけの中を群れになって畷に帰る

カラスを指さして数えた思い出がきつとあることだろう。「最近ではカラスが少なくなったなあー」というお年寄りの声をよく聞く。

実際にくわしいことはセンサスをしてみなければわからないだろうが、都市化が進み、農薬が多量に使われるようになって、

【写真2】 植物性ペリット 段々カラスはその数を減じているらしい、それとともに市街地ではカラスは人間の心のふるさとからその姿を消しつつあるのが現状のようだ。

しかし農村ではまだまだ、カラスはお百姓と縁が深い「権兵衛が種子まきや、カラスがほじくる」の情景は未だ未だ見られるようだ。中でもトウモロコシの若芽をひっこぬいてしまうことに対する苦情が一番多い。伊那谷には梨畑が多いが、実のなるころになるときまってこの梨をつつきにくる。そして明日は収穫と胸をふくらませて待っている農家の人より、一足お先きに、熟れた梨にくちばしを入れ中味をゴツソリいただいてしまう。梨の実は木につけたまま、中だけやるのだから仕末が悪い。人のいゝお百姓は次の日にその皮ばかりの梨を知らずにもいで、「このチキシヨ！」とどなることになる。そこでこの頃になると梨畑にカラスの首つりがぶらざげられる。「お前たちもこうなるぞ！」という見せしめらしいが効果の程は疑わしいものだ。(写真4) こんなことではおそろくひっこむまい。

ともかく農作物を相当荒すことは確かであるから、農家とカラスとは当分縁が切れそうにもない。それならカラスを食って留飲を下げるという手もあるが、これもあ



【写真3】 ハシブトガラス



【写真4】 クビツリになったカラス

まり味はカンバシクないようだ。上田にはカラスでんがくの有名などころがあって毎冬大量ぎゃく殺するようだが、いくら悪いことをするといっても長年つき合っている

とやはり気の毒になる。しかし彼等の長所を見つけるのになかなか骨が折れるのだ。

ただ一つ、伊那谷の冬季時になっている中川村の葛島の竹林は(第一図のF)4000羽のカラスが冬の間毎晩糞を落すので竹林の栄養は満点、タケノコの頃ともなるとすばらしいのがとれるそうだ。

以上とりとめもなくカラスのことについて書いたが、カラスに関心のある方のために、周はじめ氏の「カラスの四季」という写真集。野鳥208号平林浩氏の「カラスの集団生活」今年の日本文学学会誌4月号の私の愚稿「カラスの就時行動について」を参考までに御紹介しておこう。

(天竜中学校)

カラスについてご質問その他は下記へ

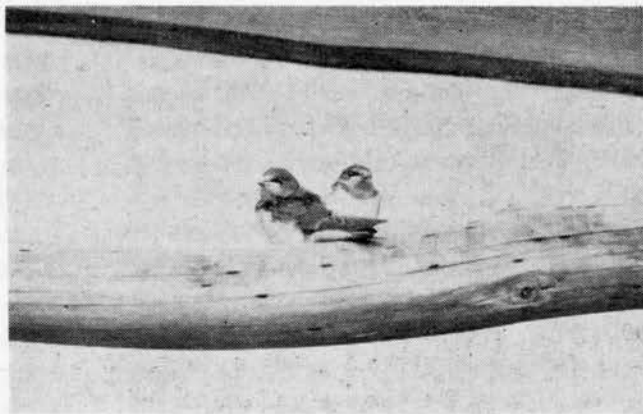
下伊那郡天竜村
天竜中学校 山岸 哲

ツバメの兄弟

長 沢 修 介

夏の終りはそっとしのび寄る。一ひらの病葉が黄色に散って行くのにもはやいた夏はもう後髪を引かれながらそと後ずさりして行くのを見せよう。コウロギの声がわずかに聞かれ始める頃からこの一家はいつも同じ所にこうして集る。私の家にも燕が来始めてからもう5年になる。季節のうつり変りには特に神経を使う私は毎年燕の来るのを楽しみに又この鳥がやって来ると本当の春の来たのを感じるのが例年の習慣になってしまった。

毎年私の家に来るのはいつも4月の1日~2日、それも必ず誰が先にやって来る。しかしどうしたものかここ数年完全に蕃殖したことがない。1年目はわずか巣作りを始めただけに終ってしまった。2年目はどうやら7卵が孵化し巣立ちまでになったが巣立にあと二日位という朝どうしたものか2羽が巣から落ちて死んでしまった。次の日も1羽が同じ運命をたどりついに完全に巣立ったものは3羽となってしまった、3年目からは妙なことになってしまった、誰が先に来るのは例年の通りだがそのあと2~3日して誰が来、巣を確保する頃になると別の誰が来て毎日誰の争奪戦、燕返しも良いことながら早朝からピーピー、ギア、ギアとせっかく作りかけた巣もそつちのけ、毎日朝から晩まで空中戦。そのうち誰の方で嫌気が



ツバメの兄弟

さして何処かに行ってしまった、昨年は巣作りが終り産卵の段になってこれが始りついに巣の放棄となってしまった。今年もそんな日が続いたが何とか産卵しヒナが返ってやれ今年は大丈夫と思ったのも束間又例の誰のあぶれ者がやって来て毎日空中戦となった。とうとう誰の方で又何処かに姿を消してしまふそのあと何処からか違う誰をつれて来たがヒナは目もあかずに放り出されたままで死ぬ運命となってしまった。新しく巣を作るのにはもう時が遅すぎとうとう放りばなしになってしまった。そして稲穂の季節を迎える頃になるといつも何処の家で育ったのか毎日私の家の軒を借りに来る一家がいる。まだ良く飛べなくても何とか親のまねをして見たくてずっと飛んではみるものうまくゆかず兄弟よりそつて親のエサをねだる姿はまことに愛らしい。どうしたものか私の家の燕はこの様な姿を見せてはくれない。

南ア植物雑感

中 村 武 久

本誌上にときおりまとまりのない南アルプス紀行を紹介したが、べつだん山岳家でもない私如きものが南アルプスの「山」を書いてみても、それはそのスジの方々からみればまことに笑止千万読むに足らないものであったろうと今更悔いている次第である。といて今これから書こうとしているものが読むに足るものでは決してないが、ただ過去4年間連続してきた南アルプス植物踏査のなかから、南アルプスの植物的話題を以下雑然と綴って、気持ちの上でのそのつぐないをしたいと思います。

(1) 南ア植物研究の

草わけについて

近く国立公園として発足する南アルプス、山としての景観、内容、殊に山岳の大きな魅力の一つである高山植物これらが北アルプスのそれに決して劣らないものもちなが、なぜこんなにその開拓が遅れていたのか、毎年南アの山に行く度毎にそれが不思議でならなかった。もちろん北アルプスの場合はウエトン氏等によって古く明治の末頃から広く世に紹介されたことはいままでもないが、かといってこうした山岳家によってのみ世に知られたのではなく、やはりそのかげには多くの自然科学者によって、その山の動植物や地質などの内容が広く世に紹介されたことが大きな力となっていることは疑えない、例へば今日もっともよく知られている北ア白馬岳についてみても、本誌3巻第5号に志村烏嶺氏が書かれているように、当時の登山者の多くは植物研究家であり地学者であったのである。こうした学者による開拓はやがて白馬岳全域の高山植物が天然記念物として今から約40年前大正11年にその保護指定を受けたのである。こうしたことから南アルプスの植物研究の歴史を探ってみることは甚だ興味深いものがあると思える。

古い文献をくまなくあさったわけではないが、この南アルプスの植物研究の草わけの頃を探ってみると実は驚くことに北アのそれとほとんど同じ頃に始められていることだ。

北アルプスでもっとも古いと考へられる白馬の植物については1900年に当時松本師範の河野齡藏先生、また東京帝国大学の矢部吉禎先生が同じ植物学雑誌14巻に採集記を書かれ、殊に矢部先生はその後1903年にやはり同じ植物学雑誌の第17巻には白馬岳産植物採集目録を発表されている、もちろんこれに続いて田中貢一氏、志村烏嶺氏、矢沢米三郎氏、小泉秀雄氏等、地元信州の学者による記録が各方面にあることはいままでもない。



東 駒 ヶ 岳

さてそこで南アルプスではどうかというと、1902年、信濃博物館学雑誌第1巻に中山音弥氏が『白崩岳採集の記』を書かれているが、白崩岳は今の甲斐駒ヶ岳(東駒)であり南アの北の主峰である。これがおそらく南アルプス植物の草わけとみてよいようだ。

続いて1904年武田久吉博士が植物学雑誌第18巻に同岳の植物採集記行を書かれている、ただその後1906年にウエトン氏が南アルプスの植物見聞を書かれたものがあるようだが、残念ながらその報文をみる機会がないのでどんな内容が書かれてあるかわからないが、いずれにしても当時の植物開拓の山としては僅か甲斐駒ヶ岳、及び近くの鳳凰山があげられる程度で、植物の豊富な北岳や仙丈岳はそれに遅れること10数年、1913年武田久吉博士の仙丈岳への採集記行を読んでみると、今の我々には植物踏査はもちろん歩くことだけでも危ぶまれるかのコースを歩かれているのである、それだけにこの山の植物も今の知識からすれば僅かしか記録されていないことはいまをまたず、その後の調査が遅々として進んでいないこともうなづける。

さてこうして南ア、北ア両山系の植物研究の始めはほとんど同じ頃に起っているが、何故今日のように南アの開拓が40年近くも遅れたか、一つには南アルプスはその山頂へたどりつくまでのコースの容易でなことも原因ではあろうが、北ア白馬岳に比べ、甲斐駒の如き植物相の貧弱な山岳がその発端とするなら、あながち学者の興味は北アに向けられたのも解らないではない。もしこれが最初に北岳辺りへ登っていたなら今日の南アルプスはずっともっと変わっていたらと想像する、しかしそうでなかったことが私にとって大変な魅力のもとではあるが。

(山博学芸員・東京農大付属高校教諭)

集団登山の時間記録について (2)

唐松岳

I 人員 職員 3人 OB 2人
生徒 55名 男子48人 女子7人

II 天候

7月13日 朝—曇り

鎌池～第三ケルンの間に時々小雨、小屋について整理体操中小雨

7月14日

御来光 雲が多くてため 帰り快晴

III 行動時間記録

第一日目(7月13日)	第二日目(7月14日)
四ツ谷発 8.15	唐松小屋発 7.00
ケーブル山麓駅 8.50	唐松岳 7.15
山荘着 9.30	唐松小屋発 8.45
発 9.50	第三ケルン 10.05
第一ケルン 11.35	細野着 2.50
第二ケルン(昼食) 11.50	バ ス
第三ケルン 1.15	四ツ谷 4.20
唐松小屋着 3.30	大町駅 4.59
	解散 5.00

III その他

落伍者なし

大町→四ツ谷間団体乗車ならず、バス・電車などで個人で行った事が去年と変わった事。

白馬岳

I 人員 職員 4人 OB 5人
生徒 114人 男子 101名 女子 13名

II 天候 第一日目 (7月13日) 曇り時々小雨
第二日目 (7月14日) 曇り時々晴

III 行動時間記録

第一日(7月13日)	第二日(7月14日)
大町発 7.20	山荘発 4.05
猿倉着 9.00	白馬頂上着 4.15
発 9.20	発 4.50
小休止 9.34~9.47	山荘着 5.00
小休止 10.10~10.15	朝食
白馬尻着 10.30	山荘発 6.45
昼食 30分間	小休止 7.30~7.35
発 11.00	
惣平着 1.10	小休止 8.17~8.22
発 1.30	白馬ヤリ着 8.40
小雪溪着 1.55	発 9.20
発 2.00	小休止 10.05~10.15
小休止 2.17~2.22	大休止 10.40~11.00

大町高校山岳部

頂上ホテル着 3.10	ヤリ温泉着 11.30
発 3.15	昼食 30分間
山荘着 3.40	発 12.00
	水場 12.50~1.00
	湿地 1.25~1.30
III その他	猿倉着 2.50
落伍者なし	発 3.30
バテ気味	大町着 4.55
男子2人 女子1人	解散 5.00

燕岳～槍ヶ岳縦走

I 人員 職員 3人 OB 3人
生徒 83人 男子 73人 女子 10人

II 天候

第1日目 (7月13日) 晴れ後曇り

第2日目 (7月14日) 晴れ

第3日目 (7月15日) 晴れ後雨

(但し雨は車に乗ってから)

III 行動時間記録

第1日目(7月13日)	第2日目(7月14日)
大町発 7.30	大天荘発 6.45
有明駅着 8.00	大天ヒュッテ着 7.15
同 発 8.40	同 発 7.20
中房温泉着 9.50	西岳小屋(通過) 9.10
同 発 10.20	水俣乗越着 10.05
合戦小屋(通過) 13.10	同 発 10.15
燕山荘着 14.30	槍ヶ岳山荘着 13.40
同 発 14.40	同 発 14.30
燕岳着 15.00	槍ヶ岳山荘着 15.00
同 発 15.15	同 発 15.30
燕山荘着 15.30	槍ヶ岳山荘着 16.10
同 発 15.40	第三日目(7月15日)
遭難碑着 16.20	槍ヶ岳山荘発 6.00
同 発 16.30	槍沢小屋(通過) 7.40
切通岩(通過) 17.30	一ノ俣小屋着 8.20
大天荘着 18.00	同 発 8.30
III その他	横尾小屋(通過) 9.25
けいれん患者一人	徳沢園(通過) 10.15
落伍者なし。	明神着 10.55
	同 発 11.10
	上高地着 11.45
	同 発 13.05
	松本駅着 15.45
	同 発 16.40
	大町駅着 17.40

博物館だより

9月7日～12日 コマクサ生態調査 白馬岳, 乗鞍岳方面

9月1日 コマクサ園外柵完成

9月16・17日 焼岳資料収集

9月23日 みずえ会写生会 館庭

9月19日 本館の地学部門に多大の援助をいただける、太田昌秀氏(大町市出身、北大理学部)の学位取得(理学博士)祝賀会が行なわれた。



資料寄贈

綾友 No43, 44 東京北稜山岳会, 明峯山岳会 Vol31
No9 明峯山岳会, REPORT No63, 64 谷の影山岳会, モンキー No45, 46 日本モンキーセンター, 四つばしNo2, 8 大阪市立電気科学館, 私たちの自然 No6 日本鳥類保護連盟, 山と溪谷 No272 山と溪谷社, 金沢文庫研究 No71 金沢文庫, 地質ニュース No85

地質調査所, 山毛樺林 No63 広島山の会, ハイカー No72 山と溪谷社, 学校博物館研究報告 No1 藤下英也, 植物趣味 No80 松村義敏, 葛城 No135, 136 泉州山岳会, 岳友 No64 岳友クラブ, 山毛樺林 No64 広島山の会, 京都山岳 61-10 京都山岳会, 独標 No80, 81, 86 独標登高会, 樺火 No297 山小屋クラブ
(敬称略)

「でっけーな」「広いね」「あっ、水平線」「いるいるっ」「こっちの方がたんといろそ」, など。これらは昨年の夏, 殆どどの児童にとって初めての経験である海へ行った時のひと騒ぎである。

「あっ、ありゃーなんだ」「すげーな」「まあきれい」……E T C。これはいずれも, 初夏の一日, 野外授業(地層の実地見学)に行った時の児童等の感慨である。

両者とも同じ児童達であり, 純然たる山の子たちである。こんな突拍子な言い方をしたのは少しわけがあっての事である。と言うのは, 前者は未知のものに対する時の, 程度の差こそあれ, 誰もが一応感ずる感慨なのである。強いて大人との相違を言えば, 素朴な感じ方と表現, それに, これだけは特有の喜びと感動がある。では後者はどうだろうか。後者に於いて, 児童等にとっては, 実は毎日見なれている景色の一部である筈なのである所がどうだろう。新発見と同じ感慨を持って, 瞳を輝かせ, 次々と自己の発見に感動し満足し奇異の目を見張っているのである。

見る目的と必要な知識を事前を知る事によって物の見方, 考え方が変わり, 従って物の価値感が変わったのである。これは又, 子どもであったからこそ容易でもあった事だろうが, この現象の媒体若しくは助長せしめたものは何であったろう。言うまでもなく教育事象なのである。即ち, 如何に価値や意義あるものであっても, 常ふだん, 極く当り前として何気なく見過ごしてしまっていては, そこに何等の感動もなく, まして価値も意義も生じないで終わってしまうのである。更にこの事は成人すればする程多く見られるのが一般でもある。反対に, それを受け入れる状態にさえなっていれば, 例えそれが物言わぬ岩石のかけら一つであろうとも, 親切に語りかけてくれるものである。こゝに, 自然の恵みを多とした豊かな人間形成が行なわれるのである。

この様な現象は, 我々の日常生活中, 誰もが経験し得る状態にあり, 又, より多く求めなければならぬ事もある。こんな所にも家庭, 学校, 社会に於ける全ての教育の存在意義が窺われるのである。

ともすれば未だ, 教育と言う語と学校が同一視されそうな昨今, 大自然の摂理の中で, 広い意味の教育とその作用の場を深く認識し合い, 現代に於ける社会人の責任とも義務とも考えて, 積極的に之と対峙する態度を身につけるようにしたいものである。もう一度, そして今すぐに周囲を見つめよう。

なおして

私は思う

(宮田嘉文)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替, 郵便切手で長野県大町市, 大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第9号 1962年9月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場